

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520323

研究課題名(和文) マーガレット・フラーにみる19世紀アメリカの女性のキャリア形成とジェンダー意識

研究課題名(英文) Margaret Fuller's Gender-equal Perspective and the Rise of Feminism in the 19th Century America

研究代表者

伊藤 淑子 (ITO, Yoshiko)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：50223201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：女性の知性と論理性が美德であるとは認められなかった時代に、果敢な声を挙げたマーガレット・フラーの著作を丁寧に分析することが本研究の目的であった。フラーの主著であり、アメリカのフェミニズムの先駆的な本であるにもかかわらず、屈折した論理展開と引用を多用する英語表現の難解さによって、日本ではあまり読まれてきたとはいえない『19世紀の女性』を日本語に訳し、研究期間中に出版した。

フラーの主張には矛盾がないわけではない。本質主義的な性差を否定し、徹底した個人主義を貫きながら、フラーは理想的な人間関係の構築と社会改革を唱える。『19世紀の女性』以降の仕事も含め、フラーのキャリア形成を分析した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyze the writings of Margaret Fuller, who discussed radically the gender-equal relation between the both sexes at the time women were not praised for their intellect and logical ideas.

I published the Japanese translation of her representative work, *Woman in the Nineteenth Century*. The publication of the Japanese translation would make the access to Margaret Fuller easier for Japanese scholars. Fuller's difficult English usage and various citations from classical works have prevented people from reading her pioneering book. I also wrote two essays and discussed her self-portrait and development of professionalism by analyzing her journalistic writings. Fuller's statement inevitably has inconsistency and includes contradiction. Fuller insists on complete individualism and at the same time aims at the establishment of idealistic community and conjugal relation between the both sexes, which is can be said to be still unresolved dilemma even today.

研究分野：アメリカ文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：マーガレット・フラー 19世紀の女性 アメリカのフェミニズム 女性のキャリア意識 ジェンダー超絶主義

## 1. 研究開始当初の背景

(1)マーガレット・フラーは19世紀のアメリカの文学、思想、フェミニズムを考えるうえで重要な位置を占めているにもかかわらず、その著作の日本語への翻訳も部分的なものを除いて出版されていない。超絶主義の研究のなかで触れられることはあっても、フラーに焦点を絞った日本語の研究書は研究代表者の知る限りない。文化史的な重要性に反して、日本における研究が積極的に行われてこなかった人物の一人であるといえる。同時代の作家・思想家の著作が数多く日本語に翻訳され、日本の研究者、学生、読者に広く紹介されているのに対して、フラーに関する日本語媒体の研究資料は極端に少ないといえる。

(2)フラーの著作は決して読みやすいものではない。その原因の一つとして、フラーの複雑で饒舌な文体をあげることができよう。多様な引用を網の目のように張り巡らせ、そこから引き出される皮肉の利いたフラーの主張は、螺旋階段のように論理を構築し、批判の矛先を何度も変えながらようやく結論に達する。このようなフラーの論述の方法は多くの批判にさらされてきた。

しかし、この点にこそフラーの戦略があったと考え、フラーの著作の分析にとりかかった。『湖の夏』のようにスケッチ、詩、逸話、対話などさまざまなスタイルを縦横に行き来することによって安定した視点を拒否すること、『19世紀の女性』のように引用を多用することによって蓄積された知の伝統を呑み込み新しい知のことばを探り当てることこそ、フラーのねらいはあったと予想する。論理性とは男性であることの自己証明であった時代に、フラーはあえて一貫した視点を解体し、断片的な文体を構築することによって、主体性を持つことを否定された者たち、つまり女性というカテゴリーのなかに入れられた者の声を表現したのであるとすれば、時代的な背景も考慮しながらフラーの著作は分析されなければならない。

## 2. 研究の目的

(1)これまで日本ではまとまったかたちで研究成果が出されていないマーガレット・フラーを、19世紀アメリカの女性のキャリア形成という視点から研究することが本研究の目的であった。第一段階として、難解な文体で知られるフラーの代表的著作『19世紀の女性』の日本語翻訳を完成し、その論理と修辞を読み解くことを目指した。

(2)19世紀前半のアメリカ社会のジェンダーの不均衡に対するフラーの強い違和感が、後の編集者・ジャーナリストとしての業績にどのように反映されているかを分析する。キリスト教的道徳観、伝統的ジェンダー観、教育

制度や法制度によって女性が知性の主流から排除されざるを得なかった時代に、フラーがさまざまな矛盾をかかえつつ獲得した言説を分析することを目的とした。

(3)日記や『ダイヤル』、『ニューヨーク・トリビューン』に発表した記事、その他の著作を読み解き、19世紀前半のアメリカという文化的環境のなかでフラーがどのような思想をはぐくみ、どのような社会的な立場をとっていたのか、どのように自分自身の文体を構築したのかを、フラーのキャリア形成の足跡をたどりつつ分析することを試みた。

## 3. 研究の方法

(1)フラーの考えを詳細に検討するために『19世紀の女性』の翻訳を完成させた。フラーの英語を日本語表現にすることはかなりの困難をともなったが、フラーの文体の細部まで写し取り、かつ日本語としての読みやすさも放棄しない翻訳を完成させようと努力した。この翻訳を通じて、フラーの論理展開の方法や思想、表現の独自性を分析することができた。

(2)手紙、定期刊行物などに発表された記事など、フラーの著述を読み解いた。全6巻で出版されている手紙は、フラーの内面を探るための重要な資料ではあるが、手紙が本心を伝えるものとはかならずしもいえず、公にすることを目的に書かれた著作との関連で、慎重に読み解くことに努めた。

(3)エマーソンをはじめとする超絶主義の知識人たちの目に映ったフラー像を探った。知的な活動から女性が排除されていた時代に、知性を武器としてキャリアを築き上げたフラーがどのようなイメージで社会に迎えられたのか、好意的なものも敵対的なものも含めて、当時のフラー批判、女性批判の言説を分析した。

## 4. 研究成果

(1)フラーの主著である『19世紀の女性』の日本語翻訳と解説を出版した。女性の知性と論理性が美德であるとは認められなかった時代に、果敢な声を挙げたフラーの著作を丁寧に分析することが本研究の目的であった。フラーの主著であり、アメリカのフェミニズムの先駆的な本であるにもかかわらず、屈折した論理展開と引用を多用する英語表現の難解さによって、日本ではあまり読まれてきたとはいえない『19世紀の女性』を日本語に訳し、研究期間中に出版できたことは、本研究のもっとも大きな成果である。

メアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』(1792)が女性の基本的権利につ

いての先駆的な主張であるとするならば、1845年に出されたフラーの『19世紀の女性』はその主張を強化し、アメリカの当時の現状も踏まえて、女性の権利が認められる社会の樹立を求めたものであるといえる。

『女性の権利の擁護』ほど『19世紀の女性』が一般的に知られていないのは、英語の読みにくさに加えて、エマーソンやソローといった超絶主義の男性思想家たちへの注目が、フラーの思想の特異性を目立ちにくくしているということもある。フラーの生きた独立戦争終了から南北戦争にいたる時期は、アメリカとは何かという文化的アイデンティティの構築を急がなければならない時代でもあった。

エマーソンが唱え、ソローが実践し、多くの知識人を惹きつけた超絶主義は、ロマンティックで楽天的な考えによって時代の要請によく応え、神を知るために必要なのは教会の権威ではなく、研ぎ澄まされた自分の精神、真理を知るために必要なのは埃をかぶった古い書物ではなく、自分自身の直観、と説いたが、魂の自由が唱道されればされるほど、保障されているはずの権利を享受できない者たちが存在するという事実が、理想とはほど遠い社会の実態を浮かび上がらせもする。『19世紀の女性』でフラーは、黒人女性やネイティブ・アメリカンの女性のみならず、白人女性も、経済階級にかかわらず、たとえ裕福な中産階級に属していたとしても、一人の個人としては認められていないということとを糾弾する。身体的にも精神的にも脆弱であると退けながら、苦役を忍ぶ女性の現状には目をつぶる男性社会の欺瞞を、フラーは皮肉を込めて批判する。

『19世紀の女性』の出版から3年後、1848年にはセネカ・フォールズで女性集會が開かれ、独立宣言の形態を引用し、男と女が平等に創造されたことは自明のことである、と宣言される。実際に女性の参政権を認める憲法修正が実現するのは1920年のことであったとしても、フラーが女性運動に重要な役割を果たしたことは疑いのないことである。

アメリカが自由と平等を掲げて成立した国であるからこそ、そのアメリカにおいて権利から疎外された存在は大きな抵抗のエネルギーを獲得することができるというのは皮肉なことではあるが、『19世紀の女性』もまた、アメリカの理想を逆にとり、社会の矛盾を突く。理想はかならず実現されるというロマンティックな信条を超絶主義と共有しつつ、女性がいかに人間的な精神の成長から疎外されているかということ、神話や古典、同時代文学、伝説から実例まで幅広く例証しながら論じる『19世紀の女性』は、ヨーロッパの文化に依存しながらアメリカの独自性を訴えるという点でもアメリカ的であるといえるが、アメリカにおける文学的想像力の変換が行われていたときであるからこそ書かれた本であるともいえる。そして時代

精神によって成り立ちながら、それを論理的に覆すことを試みるというラディカル性において普遍性をもつ著作であるといえる。

フラーが『19世紀の女性』で主張することは多くない。『19世紀の女性』のポイントは、3点に要約できるだろう。第一に、女にも男と同じ環境が必要であるということ、第二に、「人間」を「マン」として代表する男も、まだ完全なる人間性を獲得してはいないこと、第三に、社会が変わるためには女自身の意識改革が必要である、という点である。

とくにフラーが強調するのは第一の点で、一貫してフラーは、男と同じ機会を女に与えることが必要である、男と同じ自由を女が手にし、男と同じ期待を女もかけられなければならないと論じる。まだ女が男と同じ条件を与えられたことがないのに、女が男に比べて精神的に劣っているということを前提とした議論は成立しないというのが、フラーの基本的な考えである。

理想的な人間であるためには、男女がともにバランスのとれた存在でなければならないと、フラーは述べる。片方が成熟し、片方が子どものままでは、たがいに影響を与え合い、純粹に人間的な存在になることはできない、と論じる。精神的に成長するためには、男女がともに相手を認め、自分自身の存在を完結するために双方が必要であることを自覚する必要があるというのが、フラーの主張である。

フラーは理想的な男女の関係の実現を、夫婦の関係性に見出そうとする。婚姻という関係のなかにおいてしか、男女の理想的な関係を読み解くことができなかつたというのは、キリスト教を前提とするフラーの思想の限界を示すものであるということもできるだろう。しかしその一方で、性愛的な関係も含めて、対等な関係をフラーが追及したことは、むしろ斬新なことであるのかもしれない。公的な場面で男女の差異や優劣を前提とすることは慎まれる現代においてすら、表ではリベラルな装いをし、家庭では無意識に男尊女卑的な言動をする男の存在は、珍しいことでもないだろう。夫婦というもっとも私的な空間と関係性において、相手を自分の身体の一部であるかのように尊重し、純粹に倫理的であろうとする男女の理想をフラーは夢見たのである。

そのような関係が成立してはじめて、女性的な特質がどのようなもので、男性的な特質がどのようなものであるかを見極めることができる、とフラーは言う。あらかじめ男女の特性を想定することを、フラーは否定する。もし女が弱い、と男が主張するのであれば、男も同様に弱いのである。

冒頭のエピグラフは、一種の「なぞなぞ」であるが、これが『19世紀の女性』でフラーが論じようとしたことの要約であるともいえるだろう。

「弱き者、汝の名は女なり」

「大地は女王を待っている」

前半の引用が『ハムレット』からであることはすぐにわかる。ハムレットはオフィーリアに向かって、このセリフを発し、女性を否定する。ハムレットのことは女性の存在そのものを拒絶し、やがてオフィーリアの正気を奪う。それに続く「大地は女王を待っている」ということは、フラーの創作であろう。

フラーはあえて、女が弱いことと大地を治める女王の到来への期待を結びつける。一見乖離しているかに見える二つを並べて、ちぐはくなことを言っているかのように思わせるのがフラーの戦略である。二つのことがらに共通するのは、属性が女性であるということであるが、弱い者に地球が治められるはずはない、大地がその到来を待つのは女性である女王ではない、この二つの命題は両立しえないという判断を、このエピグラフは引き出す。

それに続いて置かれるのが、男女を入れ替えた表現である。

「弱き者、汝の名は男なり」

「大地は王を待っている」

先の女性についての表現に矛盾があるならば、ここに並べられた二つのことからも同様の矛盾があることを認めなければならないはずである。大地が待つのが強い王であるとするならば、王たる男は強き者でなければならないのではないか。弱き者であっては、地球の統治などできないのではないか。

この短いエピグラフ、そしてそれに続く性の入れ替えによって、フラーは『19世紀の女性』のテーマを簡潔に述べる。男性は最初から強い存在であるのではない。にもかかわらず、王の出現の期待が、地球をも統治するリーダーシップを男に備えさせる。そうであるならば弱いと思われる女性にも期待をかけてみるべきであるとフラーは言うのである。期待がかけられたときにはじめて、社会に制約されない本来の力を発揮する女性が登場するというところを、フラーは表現の異化効果を利用して端的に語る。

ジェンダーという言葉学の用語が社会に応用されて、生物学的な性とはべつに、後天的に植えつけられた社会的な女性性と男性性があるということが論じられるようになるずっと以前に、フラーは徹底して、男性的な特性や女性的な特性と思われるものは社会の習慣や制度によって人為的に作り出されたものであるという立場に立っていたのである。

男女のどちらが優れているか、男女がどのように異なる性質をもっているか、ということ議論するまえに、男女を同じ条件のもとに置いてみよう、まだ一度も男女が同じ条件に置かれたことがないのに、男であることや女であることによって、生き方や感じ方や考え方があらかじめ規定されることはおかしい、というのがフラーの主張である。

フラーはかならずしも男女を同じ条件に置くことを求めて、この主張をしたのではないようにも思われる。理想気体があくまでも想定された気体であるように、完全に等しい条件のもとで男女という違いだけを比較するという実験的状况を作り出すことは不可能であるにちがいない。

フラーの主張のポイントもそこである。フラーは完全に同一の条件を求める自分の主張の困難を言論的に可視化することによって、社会が前提とする男女差もまた証明の難しいことであるということを示しようとしたといえる。男女の性差が自明であるかのように唱えられ、庇護されるべき位置に置かれた女に期待がかけられることはない。女にも能力があることを証明しようにも、その力を引き出す機会が奪われている。フラーにとって能力は最初からあるものではなく、環境と条件がそろってはじめて引き出されるものである。にもかかわらず女に力がないことを不変の摂理のように主張する者たちの言論を封じ込めることがフラーのねらいであったといえよう。

フラーは社会が変わることと、女性自身の意識が変わることの両方が必要であると言う。理想を求めていたはずのフラーが、突然現実的な処方箋として、女であるということでの社会的な活動から疎外されているのなら、それは思索にはうってつけである、とも言う。労働に煩わされることもなく、生活に困窮することもなく、ある程度の知的な教養ももっている中産階級の女性こそ、そのメリットを活かして、思索を深めるべきだとも述べる。

男女にかかわらず能力が期待される社会を実現しようというラディカルな発言と、女の置かれた位置を利用して思索しようというプラグマティックな提案が『19世紀の女性』には並置される。また、個人として女も認められなければならないという主張は、理想的な夫婦のイメージへと回収される。21世紀の視点から見れば、たしかにフラーの主張にはキリスト教的な規範に束縛されている点も多いことも否めない。理想、純粋、心理、魂、ということばの連続も、超絶主義の「呪縛」であるということが出来るかもしれない。しかしそれは、女であることによって課せられる制約から女を解放しようとしたフラーの意志の強さを表すことばでもある。道徳的であり続けること、理想の追求をやめないことは、フラーの意志であるといえるだろう。

『19世紀の女性』には章の区切りがない。次々と神話や文学作品を引用しながら展開していくフラーの手法は、脈絡のない思いつきのようにも見えるが、社会が女には論理性がないと決めつけているときに、どのような論理を駆使することが有効であろうか。「ない」と決めつけられたもの、あるはずがないと信じられているものを、「ない」とされて

いる方法を用いて「ある」と反証することは、およそ不可能なことではあるまいか。

その意味において、フラーのスタイルはきわめて計算的で戦略的であるといえよう。フラーは感情的で非論理的であると決めつけられた女のイメージの通りに、いったんはふるまってみせる。女性の言い分に対する好意的ではない視線こそ、フラーが利用しようとするものである。相手の力を利用して相手を倒す柔道や相撲のように、フラーは社会が、男たちが自慢げに見せる論理的な力を逆手にとって、返す刀で社会の矛盾をつこうとする。

フラーは読みにくい、という人が多い。しかしフラーは本当にわかりにくいのだろうか。豊富な引用は、軽妙な皮肉へと展開し、心からの憤りとなって炸裂する。超絶主義的な思考で男女はたがいの存在を一体化できるという夢を語り、理想的な男女の関係を例示する。その理想をさまざまな事例を引き合いにしながら、具体的なイメージで示そうとする。なかでも頻繁に引用されるのが、ギリシャ・ローマの神話やギリシャ・ローマ時代の古典である。

(2)本としてまとまった形でフラーに関する論考を発表するという計画はもちこさされているが、フラーのジェンダー観とキャリア形成に関する論文を2本発表することができた。フラーの主張には矛盾がないわけではない。本質主義的な性差を否定し、徹底した個人主義を貫きながら、フラーは理想的な人間関係の構築と社会改革を唱える。『19世紀の女性』以降の仕事も含め、フラーのキャリア形成を分析した。

フラーはつねに二重の規範を受けていたといえる。自由と平等を謳うアメリカに生まれ「真理」に到達することを夢見る超絶主義の時代を生きながら、女性の知性と聡明さは、「美德」とは認められない。女性らしく慎ましくあることが求められ、女性の知的な欲求は道を閉ざされる。女であることは社会から何も期待されないことであることを、フラーは思い知らなければならない。そのような状況にあって、女性の権利の実現のための言論を生み出そうとしたのがフラーであった。

フラーの初期の教育は父親によって施される。フラーの父ティモシーはハーヴァード大学で法律を学び、家族は田舎に住まわせながら、州議会議員として、やがて下院議員として活躍した人物である。ティモシーはフラーが幼少のころにラテン語やさまざまな学問を教え、理解の速い聡明な娘の成長を楽しむ。父親の不在中にもさらに勉強を進め、フラーはまさに「父の娘」として育つのである。

フラーが父親によって高度に知性を磨く機会を与えられたことは幸運なことであったが、さらに知的な探究に専心することを歓迎されたわけではない。『19世紀の女性』に

も、娘を控え目で従順に育てたいと語る男性が描かれるが、それはフラー自身の父親の姿勢でもあった。

1839年から44年にかけて、フラーはボストンの裕福な階級の女性たちのために「会話」という勉強会を主宰する。1840年にはエマーソンからの依頼で、超絶主義の機関誌『ダイヤル』の編集長に迎えられ、フラーは2年間そのポストを務めている。

『19世紀の女性』の元となるのは、「大いなる訴訟 男対男たち、女対女たち」と題され1843年に『ダイヤル』に掲載された論文である。単数形の男は理想的な男性、複製形の男は現実の男たち、同様に、単数形の女は理想的な女性、複製形の女は現実の女たちのことを指す。理想を語るのは超絶主義の習いであるとしても、あるべき理想と現実の男女のあり様の大きな乖離は、人間の理想を求めながら女性としての現実を生きることを余儀なくされたフラーならではの視点であるといえる。

『ダイヤル』の編集を辞し、ニューヨークに移ったことは、フラーにとってボストンの知的ネットワークからの独立といえる。そのきっかけは、当時の「辺境」である五大湖地帯からイリノイ州、ウィスコンシン準州をめぐる旅をし、それを『湖の夏、1843年』として1844年に出版したことである。『ニューヨーク・トリビューン』の編集長ホレス・グリーリーに認められ、フラーはニューヨークに移る。ピューリタン共同体以来のアメリカの知的な拠点であるボストンを離れ、フラーはようやく知性の自立を得たととらえることができる。

フラーのジャーナリストとしての活躍の時期は短いものの、イタリアへ特派員として赴き、帰国の航海で海難事故に遭遇し没するまでのフラーの仕事は、アメリカ、とくに北部が南北戦争に突入するための大義名分を与えたと考えられる。歴史資料としても再評価されるべき記事である。父や夫、家族の関係性においてのみ女性の存在が意味をもち、女性は家庭のなかで私的な存在として生きるべきであるというジェンダー規範が強かった時代を生きたフラーの著述には、いまから見ると古風に思われるほど女性を家庭的存在として表現する部分もあるが、そうであればこそ、フラーの社会への異議申し立てと完全なる個人の確立への希求は意義をもつといえる。

(3)本研究を通して、フラーを女性の権利要求の言説の文脈に位置づけることができた。フラーを読み進め分析していくあいだに、フラーの女性の権利をめぐる主張が、フラー以降の他のフェミニストの著作にみられる論法に通じるものがあることを発見したことも成果であった。シャーロット・パーキン

ス・ギルマンやゾラ・ニール・ハーストン、スーザン・ソントグの主張や論法との類似性をさらに探してみたいという新たなテーマを見つけることができた。アメリカを語ることばが古びないのは、アメリカが非現実的な理想を先に掲げて、それに近づくことを目指してきたからだともいえるだろう。フラーのことばがいまでも有効なのは、そこに描かれた理想が、一世紀半以上を経ても、まだ実現していないからにほかならない。

理想を掲げて、理想とは程遠い現実を変え、理想に近づくことがアメリカの物語であるとすれば、フラーもアメリカの物語を奏でた一人である。アメリカの大統領もアメリカの物語を語りながら、アメリカを超えてユニバーサルな民主主義への志向を語る。オバマ大統領の二期目の就任演説はアメリカの独立宣言の「生命、自由、幸福の追求の権利」を繰り返す愛国的な内容であったが、アメリカ人であるというアイデンティティのかけらがなくても聞く人の心をとらえるのは、その普遍性においてである。2013年の時点において、大統領が女性の権利を確認しなければならないほどに、同性愛者の権利について言及したことが画期的であると評価されなければならないほどに、一人ひとりの人間が有するはずの不可譲の権利が実現していないということでもある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

伊藤 淑子、『19世紀の女性』におけるフラーの自己イメージの位相と声、大正大学研究紀要、査読無、99号、2014、pp. 387 - 398

<https://tais.repo.nii.ac.jp/>

伊藤 淑子、マーガレット・フラー『19世紀の女性』にみる理想の女性、男性、そして社会、津田塾言語文化研究、査読無、28号、pp. 26 - 37

[図書](計1件)

伊藤 淑子、新水社、19世紀の女性：時代を先取りしたフラーのラディカル・フェミニズム、2013、226

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 淑子 (ITO, Yoshiko)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：50223201